イマカナ［支え合い］

工夫重ねて心の交流

岡田さんと大塚さん〈3〉

市民後見人

人に寄り添う

今回は本人に寄り添うことを大切にする2人の市民後見人の活動を紹介します。

70代の岡田完さんは高齢者施設の管理職などの経験を通じて、高齢者や障害者を支えることにやりがいを感じ、市民後見人を目指しました。40代男性の後見人として、本人の言葉を引き出すため、面会する場所を工夫したり、本人が楽しみにしている外出支援の調整をしたりしています。

後見人の活動は難しく捉えられがちですが、「情報や知識は、関係機関と協働することで補える。後見人である前に一人の人として向き合い、できる範囲で支えていきたい」と語ってくれました。

市民後見人の岡田さん（左）と大塚さん

大塚ヨシ子さん（60代）は、80代女性の後見人となって3年目になります。お盆の時期には季節行事を大切にする本人の気持ちを尊重し、供え物を持って訪問しています。

その時の会話の中でお墓の話題になりました。以前から気にはなっていたものの、お墓や万一の時のことなど、触れることに戸惑いを感じていましたが、「あなたに相談してもいいのね」と本人の心の内を引き出すことができました。本人と墓参りに行ったことのある友人からも話を聞き、元気なうちにどうしていくのがよいか本人と一緒に考えています。

「地域とのつながりを大切にする本人の人柄から教わることも多く、市民後見人の活動は大変というよりも楽しい」と充実した表情をみせてくれました。（随時掲載）

横浜生活あんしんセンターから

2019.11.26_神奈川新聞　掲載